

舌戦

—マルコによる福音書 12 章 13～27 節による説教—

2020 年 4 月 5 日

今日は 2020 年度最初の礼拝であり、教会暦では棕櫚の主日、すなわち受難週の始まりです。すでに、わたしたちは 3 月 15 日の説教で、イエスさまのエルサレム入城の説き明かしをしております。そして、翌日の月曜日にイエスさまは宮清めと呼ばれる神殿の肅正をなさり、その出来事の前に実のならないイチジクの木をイエス様が呪われた結果、翌日にはそれが枯れていたという出来事が記されます。この翌日とは火曜日のことで、ここから始まる一日の記述が長いのです。神殿に手を出したことで決定的にマークされたイエスさまは、この男を殺して排除しなければならぬと、かたく心に定めた祭司長、律法学者、長老たちからつぎつぎと難題をもちかけられます。言葉尻をとらえてイエスさまを陥れようとするもので、なぜこんなことをしたのかという権威をめぐる問答、これを退けるとすぐに今度は別の人たち、つまりファリサイ派や、ヘロデ派が送られて、今日読みました納税についての問答、つづいてサドカイ派が来て復活についての問答など火曜日は全体で 4 つの問答がしるされ、イエスさまはそのいずれにおいても敵対者を退けられ、最後に世の終わりと神殿の終わりに触れられるのです。こういう全体の流れを頭に入れておいて、今朝はこの税金を皇帝に納めることをめぐって示されたイエスさまのお言葉から、わたしたちへの招きを聴きとりたいと願っています。

皆さんは「金は天下のまわりもの」という言葉を聞いたことがあると思います。しかし、ちょっと考えれば分かることです。

がお金は生き物ではありませんから、足があつたり、羽が生えていてお金自体が歩いたり、飛んでゆくわけではありません。人間が動いてゆき、そこでお金を使って商品やサービスと交換され、お金がまわるのです。現在、コロナウィルスで国同士の行き来や、外出の自粛が行われている結果、当然、人の行き来が停滞し、お金が使われる機会も場所も少なくなっていますので、お金も天下を回リません。お金は社会や、国々をまわる血液のようなものであることがよく分かります。いまわたしたちは地球規模で血の巡りが悪くなっているのですね。人と金の動きが滞ると活力がなくなり、本当に大変だということを現在進行形でわたしたちは体験しています。しかし、感染拡大を防ぐためには外出自粛をせざるを得ないジレンマに苦しめられています。出かけてお金を使いたい感染接触を警戒して出られないわけです。ところでこのお金には必ず、いくらかという価値、価格の単位が記されます。つまり、100円であるとか、5千円、1万円という貨幣単位が刻まれ、これに肖像やイラストが印刷されています。当時はまだ紙幣はありません。紙自体の発明がない時代ですから、貨幣はようやく金属の段階に到達したあたりです。そしてお金は、モノやサービスを買うことが出来る、つまり力の単位であり、バロメーターでもありますから、お金持ちは使える力をたくさん蓄えていることになります。そして、そのお金を貯え、使う人間に力を与えている貨幣には、人間にこのような力を与える貨幣を鑄造したわたしは偉いのだという、刻印がきざまれている。金は千円には千円のもつ力、1万円なら1万円のもつ力があり、その力を振るうことを可能にさせている国の威信というか、プライドというか、名誉がかかっている。何によって、この力が保障されているかということが貨幣の表面に刻まれているのです。それがここで問題になっています。ローマ皇帝に税金を納めることは律法にかなっているか、

納めてよいか否かという問いかけに対して、イエスさまは「なぜわたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨をもって来て見せなさい。」と言って、質問者に貨幣を出させ、「これは誰の肖像と銘か」とお訊きになりました。そして、「皇帝のものです」と彼ら自身に刻印を読ませ、貨幣に刻まれている肖像を答えさせました。そして、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と締めくくったのです。彼らはイエスさまの言葉に驚いたと言います。今日は長い説き明かしは出来ないのですが、このお言葉は、世俗的なことと神さまのことを分けて考えてよいということではない、ということを描きさせて頂いて、今朝はひとつだけ、わたしが一番教えられたことに絞って分かち合いをします。それはここでイエスさまが、「神のものは神に返しなさい」と言われたことです。「返す」ということは借りていることが前提ですね。この感覚を皆さんはお持ちですか。わたしにとって、キリスト教信仰に入る大きな転機は、生きているのではなくて生かされているのだと気づかされたことです。自分が主語ではなくて、神さまが主語なのだということに気づく。そうするとルターが臨終のときに言ったという「我々は乞食だ。実際に」という、すべてを神さまの御手から頂いて生きてきたなあ、生かして頂いたなあ」というコメントも出てくると思うのです。しかし、ふだんはそう思っているけれども日常の場面を生きるときはこの基本的な真実を忘れがちです。自分の都合と、自分の考えを中心に生きて顧みない。世俗の中—カエサルの世界—で生きているわたしたちは毎日の判断、行動を神さまとの関わりで考えていない。これもあれもカエサルのものと思って、神のものは神に返しなさい、という神のものに、もしかして何もカウントしていないのではないのでしょうか。何も借りていない。そのつもりはない。だから返さないし、ささげない。そういう思考になっていないか。しかし、イエスさまはそうではないの

です。お返しになるのです。借りたままにしておかない。借パクという若者言葉があるそうですが、借りたままパクってしまう（盗ってしまう）ということはないのです。この二日前、日曜日にエルサレムに入城した時の一幕を思い出してください。マルコによる福音書 11 章 1 節以下、83 ページをもう一度読んでみます。こうあります。

一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして言われた。「向こうの村に行きなさい。村に入るとすぐ、まだ誰も乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて連れてきなさい。もし誰かが『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」

いかがでしょうか。イエスさまはお返しになります。借りたものをきちんと所有者に返されるのです。それは究極的には、神のお造りになった世界の中に、神のご支配の中に自分を位置づけて生きれおられるからです。どのひとつも自分のものという考えではないのです。野の花も空の鳥もこの世のすべてが神の恵みのご支配のもと、配慮の許に置かれていて、ご自身の命もひととき借りているに過ぎないことを弁えておられるからです。だから真に自由であり、平安なのです。わたしたちは返すことを忘れて、「カエサルのもの」というカテゴリ、棚を作ることで、この「お借りしている」という感覚を見失ったり、麻痺させているのではないのでしょうか。そして当然、カエサルも人であります。イエスさまは「カエサルのはカエサルに、神のものは神に返しなさい」と教えられることで、わたしたちをふたたび創造主である神のご支配のもとに招き寄せてくださ

り、平安と祝福に生きるようにと願っておられるのです。

お祈りいたします。